NPO 法人　教育支援グループ　Ed.ベンチャー　広報誌　2025/11/20 発行　**No.71**
え　ど　べ　ん　だ　よ　り

Ed.ベンだより

〒 242-0007　大和市中央林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107
電話／ Fax 046-272-8980　Email: toiawase@edventure.jp　URL https://edventure.jp/

現在の学校の重層化した構造について

教育の問題を論じるためにこのお便りはあるのですが、どうしても、教育以前の政治の状況があまりにも不安で、ついつい触れざるを得ないことがとても残念です。あきらかに日本の国は、いま戦争ができる国へと変わりつつあります。「台湾有事は存立危機事態」と明言した首相の言葉は、多くの波紋を広げていますが、ご本人は「すっきりした」程度でしかないようです。まして、政府がこれから進めようとしている「殺傷力のある武器の輸出拡大」は、今までの武器輸出の「五類型」の規定を撤廃しての方向性ですから、本来は何の議論もなく進められるものではありません。まして、「兵器産業による経済の活性化」は、戦後の日本社会の禁じ手であったわけで、「戦争はしない、戦争には加担しない」という、今の日本の根本の理念を損なうものであることは間違いありません。今こそ「戦争をしない国―日本」を次の世代の子どもたちに引き継ぐことに、本当の価値があるように思いますし、そこにこそ教育の役割も生まれてくるのではないでしょうか。現在の国際的な状況は本当に混とんとしています。一口に「平和」といっても、どうすれば平和を守れるのかは、本当に難しい問題です。その難しさまで含めて、子どもたちには「考え、実践する」力をつけていってほしいと願うばかりです。

こうしたことを踏まえたうえで、今回は現在の学校教育がどのような構造になっているかということと、それでは今後はどうあるべきかという、ちょっと抽象的な議論になってしまいますが、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

皆さんもよくご存じの通り戦後の学校教育は、主権在民のもとに平和で豊かな国をつくる国民を育てることを目的に始まりました。それぞれの地方で、それぞれの場所で、この考え方は歓迎され、様々な実践が生まれていきました。その時代の教員や子どもたちには、新しい日本社会への大きな期待や、社会へ参画していくことへの希望があったのではないでしょうか。「民主国家日本」への憧れです。

このことは、昭和 22 年に「試案」として示された最初の学習指導要領でも、「戦前の画一的な教育から、平和と民主主義を重視する教育」をめざしたことでもわかります。もちろん生活はまだまだ厳しかったでしょうが、再出発のエネルギーは、民主教育を掲げる学校現場だけでなく、いたるところにあふれていたのだと思います。

ところが、日本の経済活動が発展し、高度経済成長するにつれ、徐々に教育の目的が変質してきました。経済発展に寄与できる人材の育成を、学校教育の主眼に置き始めたのです。もちろんそれは表立って戦後の教育を否定し、全く新しいものを作ろうとしたわけではなく、指導要領の位置づけや、学力重視の考え方によって、学校教育は変貌していきました。「勉強ができること」が学校の中で第一の価値観になっていったのです。「就職列車」で地方から上京していた子どもたちは、「大学受験」のために上京するようになったのです。「受験地獄」という言葉が生まれたのは、大学受験雑誌『蛍雪時代』からであったのは、何とも皮肉なことです。

学習指導要領の変遷をみていると面白いことに気が付きます。それは、「さらなる学力」という詰め込み型と、「ゆとりによって柔軟な発想の子どもを育てる」というゆとり型とが交互に位置づいてきたことです。それは、当時の経済界が要求する人材（それはもちろん「社会が要求」と書き換えられてはいますが）も、揺れ続けた証でもあります。

神奈川県でおこなわれていた「アチーブメントテスト」はまだ皆さんの記憶にありますか？中学校 2 年生の最後の時期に行われた、県下一斉のテストで、進路の資料にもなりました。1997 年に廃止されましたが、スタートは昭和 25 年の 1950 年に始まったのですから、長い期間実施されていました。子どもたちの学力を把握することが目的とされたのですが、進学の際の資料ともなることから、いわゆる「数値化できる学力の向上」が子どもたちの学習の動機とされていったのです。こうした学力把握のための「テスト」は全国の多くの県で実施されています。

「学力偏重」と批判される学校教育の中では、こうした学校教育に反発する子どもたちも当然出てきます。その当時ではいわゆる「不良」と呼ばれた子どもたちです。全国的に吹き荒れた一昔前の「荒れる学校」は学力中心主義によって周辺化された子どもたちの抵抗だったのかもしれません。

しかし、この「反抗的な子どもたち」の姿は、今はもう全くと言っていいほどお目にかかるこ

とはありません。なぜでしょう？学力中心の「学校にのれない子どもたち」が出ないように学校が生まれ変わったからでしょうか。残念ながら、そうは思えません。子どもたちに聞くと、「そんなのダサくて流行らない」と言いますが、「のれない」子どもたちはどうなってしまったのでしょうか。

この問題を解くことが、実は現在の学校の構造を明らかにすることにつながっていると、私たちは考えます。「荒れた学校」の後にできた学校システムでは、「のれない子どもたち」一人一人に、それぞれの場所を早い段階から提供する、という「先手必勝作戦」が進められたからなのです。情緒級・知的学級・不登校通級教室といった場所が準備され、「学級でついていけない」子どもたちの場所が保障されるようになったことで、問題を抱える子どもたちが一気に爆発することはなくなりました。またその一方では、クラスのまとまりが行事などの取り組みによって強調され、お互いを仲間として認めることの重要性が強く叫ばれるようにもなりました。

このことは一見よさそうですが、そこには落とし穴もあります。適性に応じて準備された場所が、他の子どもたちとの分断を生み出す一方、本級では画一化が進行している可能性があります。

現在関わっている情緒級の中二の生徒に、「いつから情緒級なの？なんで入級したの？」と聞いたところ、「いつからかわかんない。小二の頃かな？理由は知らない。」という答えが返ってきました。それでも彼は、ずっと、いまでも情緒級にいるのです。「戻りたい？」「いや、いいよ。」と彼は遠慮がちな視線で答えてくれました。

現在ではどこの学校でも問題となっている不登校の子どもたちへの教育政策は、「一人一人に寄り添って、個々が抱える問題を少しずつ解決していく」方向です。子どもたちが抱える問題には、担任だけではなく制度化されたカウンセラーもお手伝いします。学校の中には、不登校の子どもたちが通える教室も作りました。これだけみると、本当に丁寧に対応しています。でも、不登校の問題が大きく改善されたという報告は聞かれません。なぜですか？

それは、「子どもから登校拒否されている学校」の在り方に問題があるのではなく、問題行動をする個人の中に問題がある、と整理しているからです。つまり、学校は悪くない、来られない方に問題がある、という整理です。「すべての子どもたちが来られる学校を作ろう」という方向に進むことはありませんでした。

こうした、重層化した構造が現在の学校です。子どもたちはお互いがフラットな関係性にはありません。

なおかつ、最近とても心配な「物言い」を文科省がするようになりました。それは「個に応じた学びの多様性」です。不登校児童生徒へはもちろん、教室の学びにおいても「学びの多様性」の必要性を打ち出してきました。もちろん、このこと自体は歓迎すべきことだと考えています。いままでは、あまりにも「個」を飛び越えたところに学びがありました。しかし一方、現在の重層化した構造を持つ学校現場で「個」と「多様性」を強調すると、学びが分断されていく可能性が高いのではないでしょうか。それは、重層化した構造にいる子どもたち同士には、フラットな学びの関係はできないからです。このことをしっかり踏まえたうえで、私たちは「個」と「多様性」に向き合わなければなりません。

そしてもう一つ、とても気になることがあります。それは、あれほど言っていた、経済界に後押しされた「学力」の問題はどこへ行ったのか、ということです。これは妄想ですが、ひょっとしたら、もうこれからはあまり学力は声高に叫ばれないのではないかと思います。経済界は、それだけ優秀な人材を手に入れるだけの道筋をもう持っているのです。それは、優秀な私学であったり、海外からの人材であったりと、もう、日本の公立学校全体に人材育成の網をかける必要がなくなったのではないかと推察しています。

私たちは、公立学校の役割をもう一度整理し、学校現場では、課題とすべきことを知恵を出し合って整理しなければけないときに来ているのではないでしょうか。

これからのEd.ベンチャーの学習会

理論学習会　●12月13日(土)13:45～15:45@大和市ポラリスroom6
テーマ:学校教育の今後の展望を考える

授業研究会　●12月13日(土)16:15～18:15@大和市シリウスroom6
テーマ:若い教師の現場からの報告の検討

インクルーシブな社会を目指す学習会
●12月14日(日)13:40～16:30@大和市ポラリスroom3
講演:授業デザインからインクルーシブを考える:デジタルシチズンシップの取り組み
講師:草原和博氏(広島大学　教授)

◆理事のひとこと◆2004年制作の映画“A Day Without a Mexican”では、カリフォルニア州のある都市において、メキシコ人が一人もいなくなった1日が描かれている。朝起きた時からメイドがいない、タクシーが来ない、ごみ収集ができないなど中南米からの移民が担っている社会インフラが停止しているのである。翻って日本も外国人に依存している産業分野が多数存在する。現政権は外国人に対する規制を強化する方針をとっており、日本で生活し、働き、学んでいる外国人が日本から排除されるのではと気をもんでいる。外国人の子どもたちの教育から始まる共生に人材と予算を潤沢に分配されることを政府に強く望む。日本に来てよかったと感じてもらえるように。(FK)